

歌枕二世譚二編

一筆菴主人作
一陽齋豊國画

初編の變の観際をそとらるゝね發端の佳境と六秋と七小町と凡の語句を取ると云ふその所為をいふに佳境と云ふは遠く海を思ふに
葉をり由は杜撰藤漏文をそとらるゝね發端の佳境と云ふは遠く海を思ふに
て刻印の字も賣却の字も合ぬと板元の怪作と云ふは遠く海を思ふに
此編より葉平が云ふの重なる歌枕伊勢物語の佳境と云ふは遠く海を思ふに
東より遠く三篇の篇より佳境と云ふは遠く海を思ふに

逸妓散古渡依羅

一筆菴主人作
香蝶樓豊國画

此の書は逸妓の往來を記す名妓の傳と集め
附録の説と云ふは逸妓の傳と集め

鳳来堂英版

錦昇
文庫
國貞
画
種彦
作



鄙
口



遊
里

二十一編上

外題曲豆團扇

女
鹿
画

錦
昇
棹



花
彦
作

廿二編下

夏
雲
那
之
天
の
花
彦
か

廿二編上



火の
心

種彦著 芳虎畫

其由縁鄙俚 第二十二編下帙



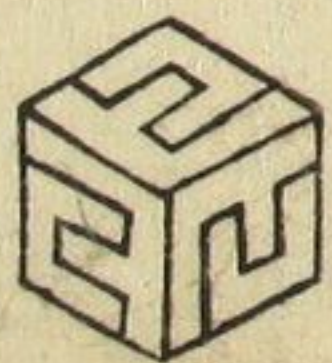
錦昇堂発兌

源氏の巻名に牽牛子葫蘆何りて盡顔あきい如何俗きて歌小詠きぬ
故と答へ由誰のり。さうばあれ程古昔より哥り詠松虫を出さば鈴
虫を採たる何如を詰りて自己賢慧しやと誇人も有とるむ論説乃是
非を問を據あれ種小取が戯作者の出精もさ。先師の後涼殿の更衣
に比る女の名を畫顔と号らばたれ。在下も松虫といふ惡婦をさうけ
鈴虫の巻は漆化負ふあれど此松虫の松より住を枯す毒虫りて
鳴もせぬを軒渠をも催さ。猶欠伸を引黛も磯菜の昔の花街をさ
吾古木の追福の本文の支あれど實の案づもの宴是へ上冊乃坊
主臭さ白湯のやうな物語の氣を轉る追りて盡顔もど華も持ば
由縁の画らしくあねね難る人の有るをあらはば紫のあやふ
倣ふ物り。夕霧の巻よかりたれど藤屋のりり尊もいあまらるあむ

甲子新春



柳亭種彦





鈴奥の巻

あつごら

はま

の

さ

ら

の

あ

ん

ぢ

あ

ら

ん

ぢ

あ

ら

ん

ぢ

あ

ら

ん

ぢ



此より宵の面様十二編の下に既
出されど脚おりの由有て又存つ



月を
あつ
あつぬるそ
たじろきよ
そのかへ
備を

八月十五夜
雲井丞氏仲
四郎尚久と

先將軍

義植公の
御所

小川の

御館へ

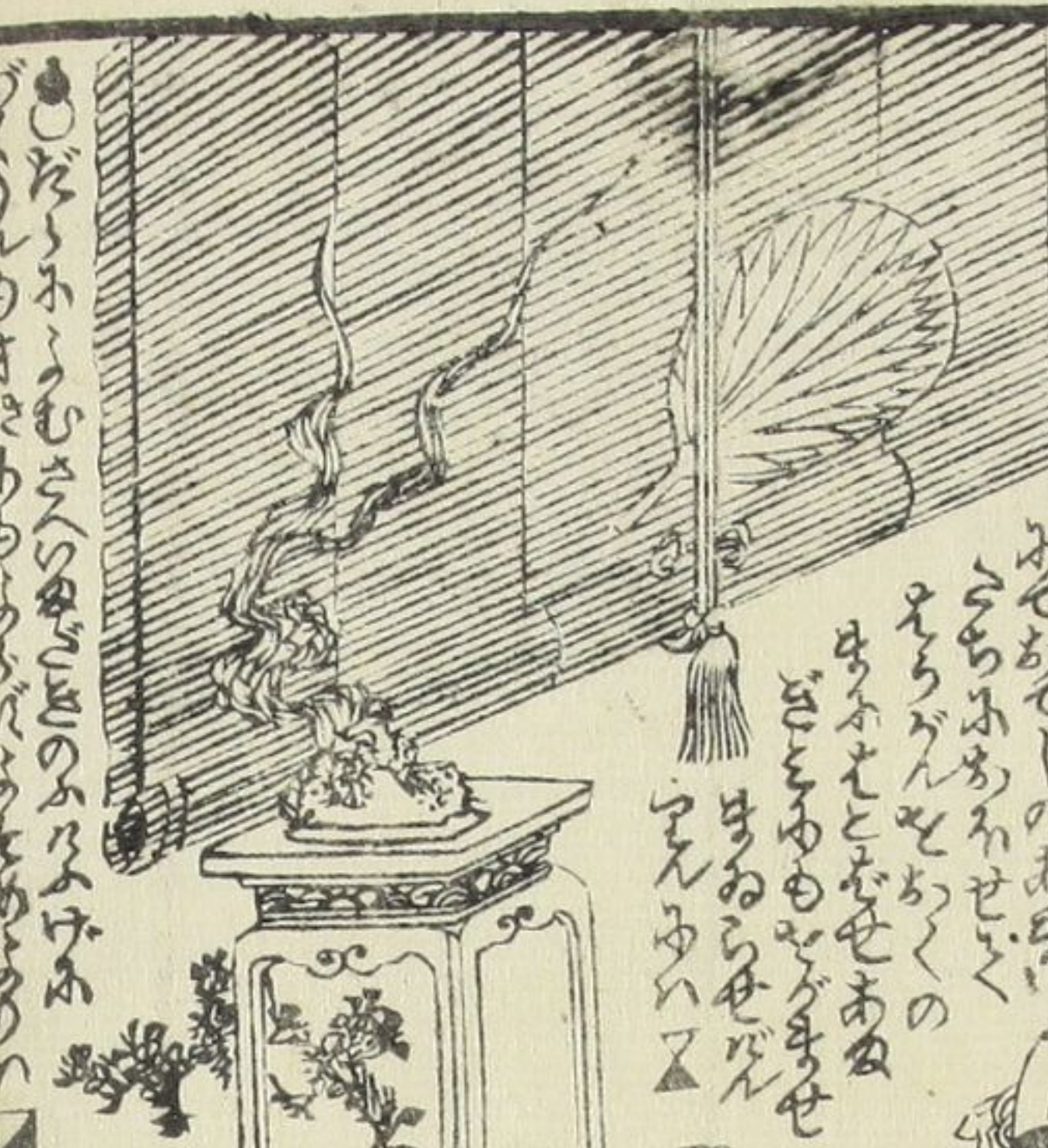
たふふ
せころ



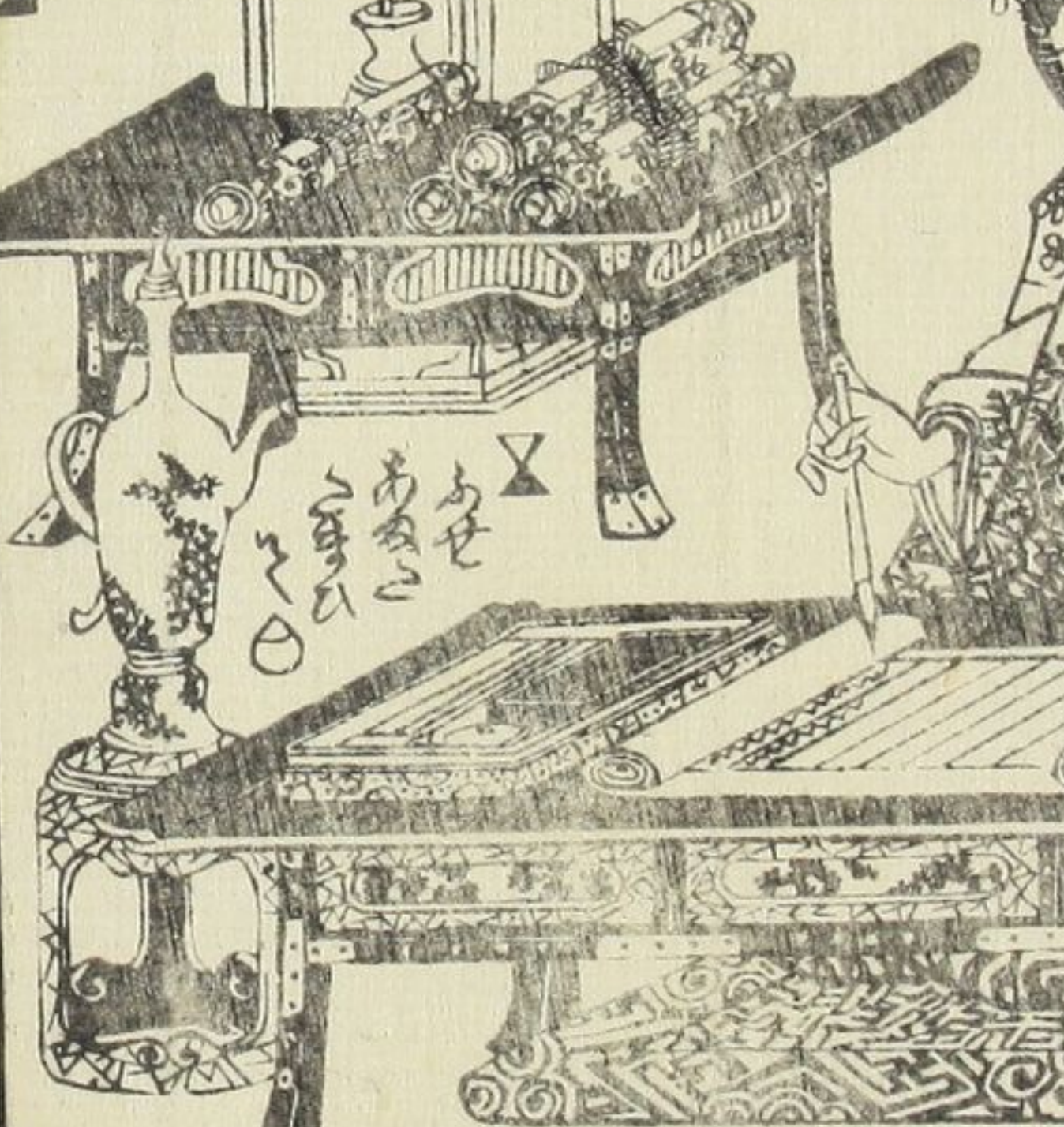
あつぬるそ
たじろきよ
そのかへ
備を

二人同道
子息も
赤松の
文木

あるものゝあかき
 一のまのたてたことさ
 一まのたてたことさ
 めのたてたことさ
 のたてたことさ
 とつたことさ
 めのたてたことさ
 のたてたことさ
 とつたことさ



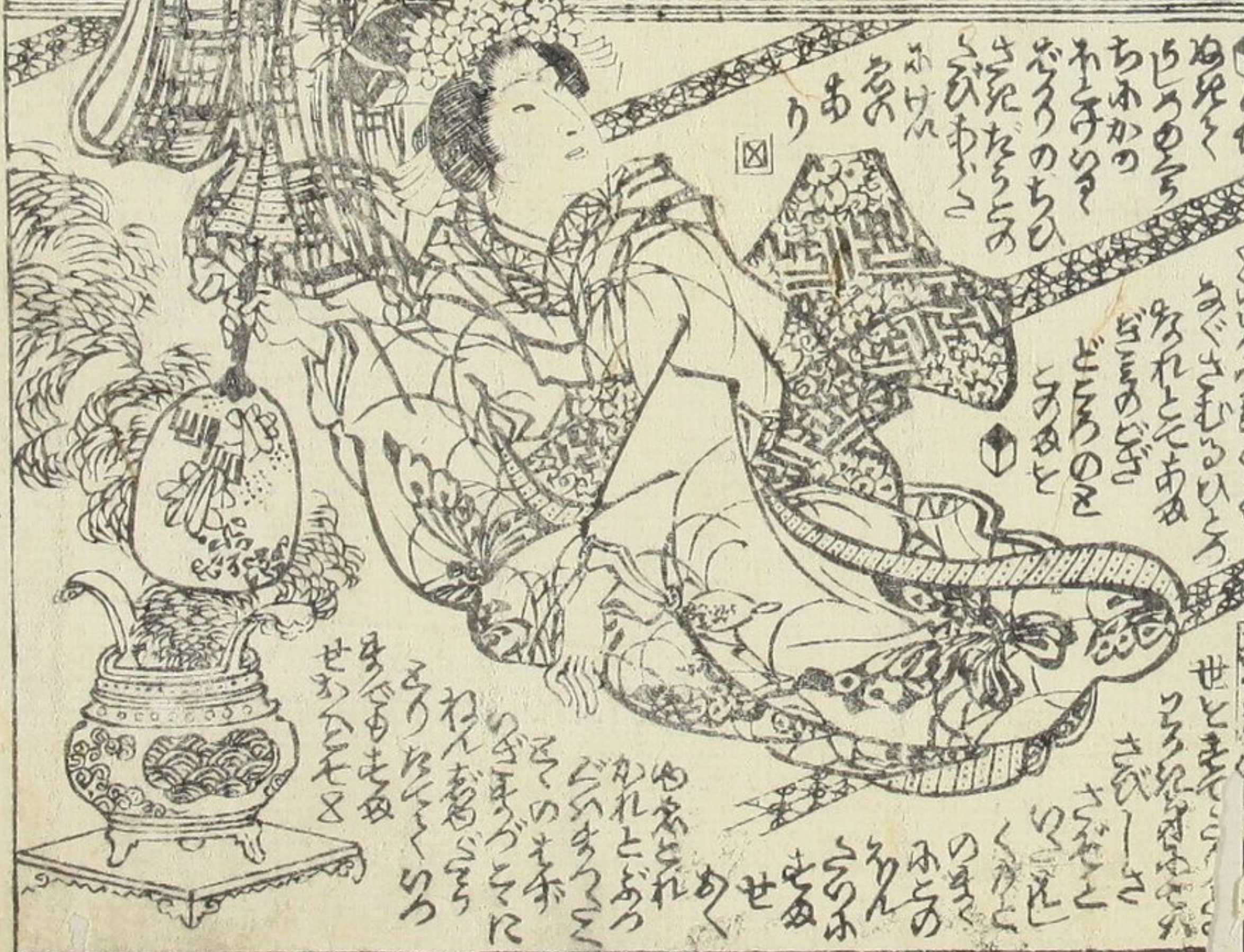
おむかひのさか子どもの
 ちかひのさか子どもの
 めがはれのさか子どもの



あつたことさ
 ちかひのさか子どもの
 めがはれのさか子どもの



あつたことさ
 ちかひのさか子どもの
 めがはれのさか子どもの

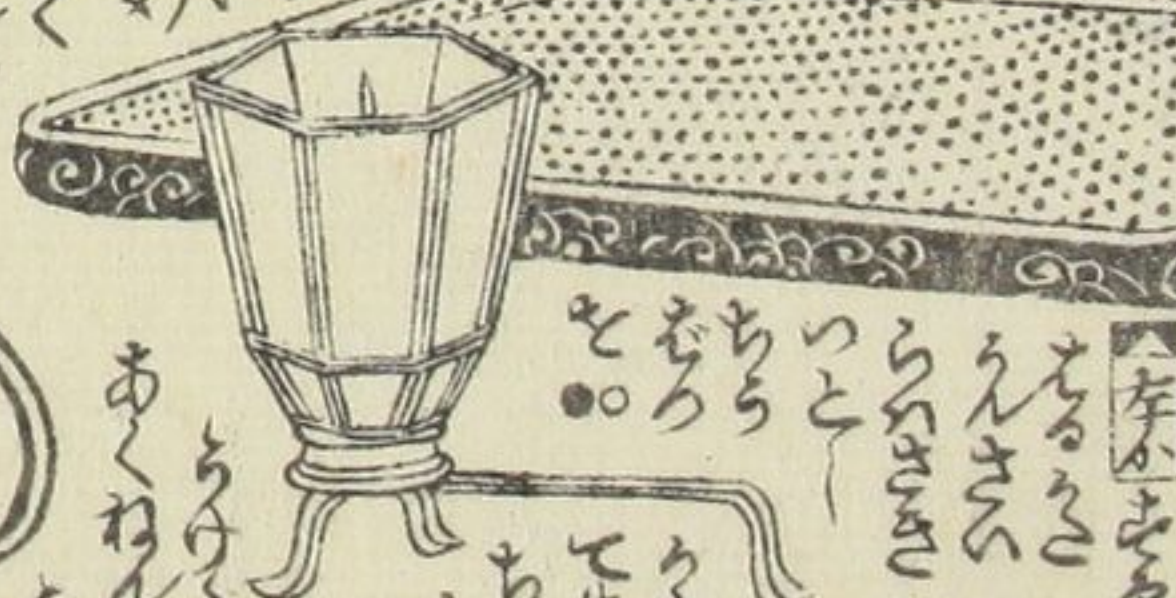


あつたことさ
 ちかひのさか子どもの
 めがはれのさか子どもの

【寄俵】かたしもくわに
あつたおぼえ
はたか
のしほの
らね。



【左】のきりぎりすの
うたをうたうちの
おんなが
あつた
おぼえ
はたか
のしほの
らね。



【本】のきりぎりすの
うたをうたうちの
おんなが
あつた
おぼえ
はたか
のしほの
らね。

【寄俵】かたしもくわに
あつたおぼえ
はたか
のしほの
らね。



【本】のきりぎりすの
うたをうたうちの
おんなが
あつた
おぼえ
はたか
のしほの
らね。

【寄俵】かたしもくわに
あつたおぼえ
はたか
のしほの
らね。

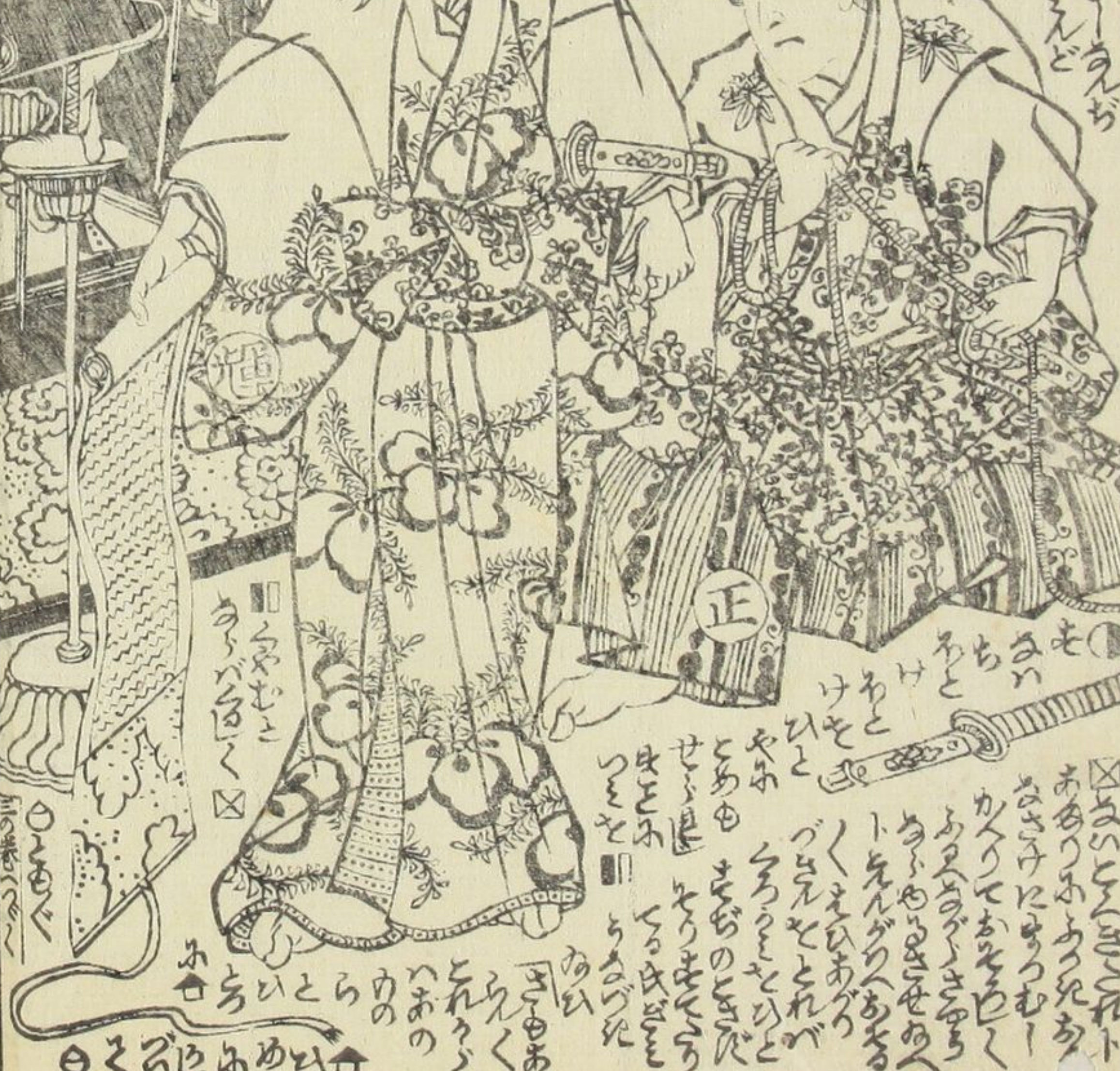


【本】のきりぎりすの
うたをうたうちの
おんなが
あつた
おぼえ
はたか
のしほの
らね。

種彦作 國貞畫

五島あけのつらと
 まれどぬまき
 一ののり
 と久く人
 をかかせ
 さふまは丸
 さあすあす
 あめあらん
 あくあ
 ぶん
 ああ
 くの
 あくあ

三の...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...



正
 け
 け
 け
 け
 け
 け
 け
 け
 け
 け

三の...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...

三の...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...



三の...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...

三の...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...

△△らむきつるをのさのるまふら小川にの

月影十一



月影十一

三御所より...
ついでに御所より...
おのれは...
おのれは...
おのれは...

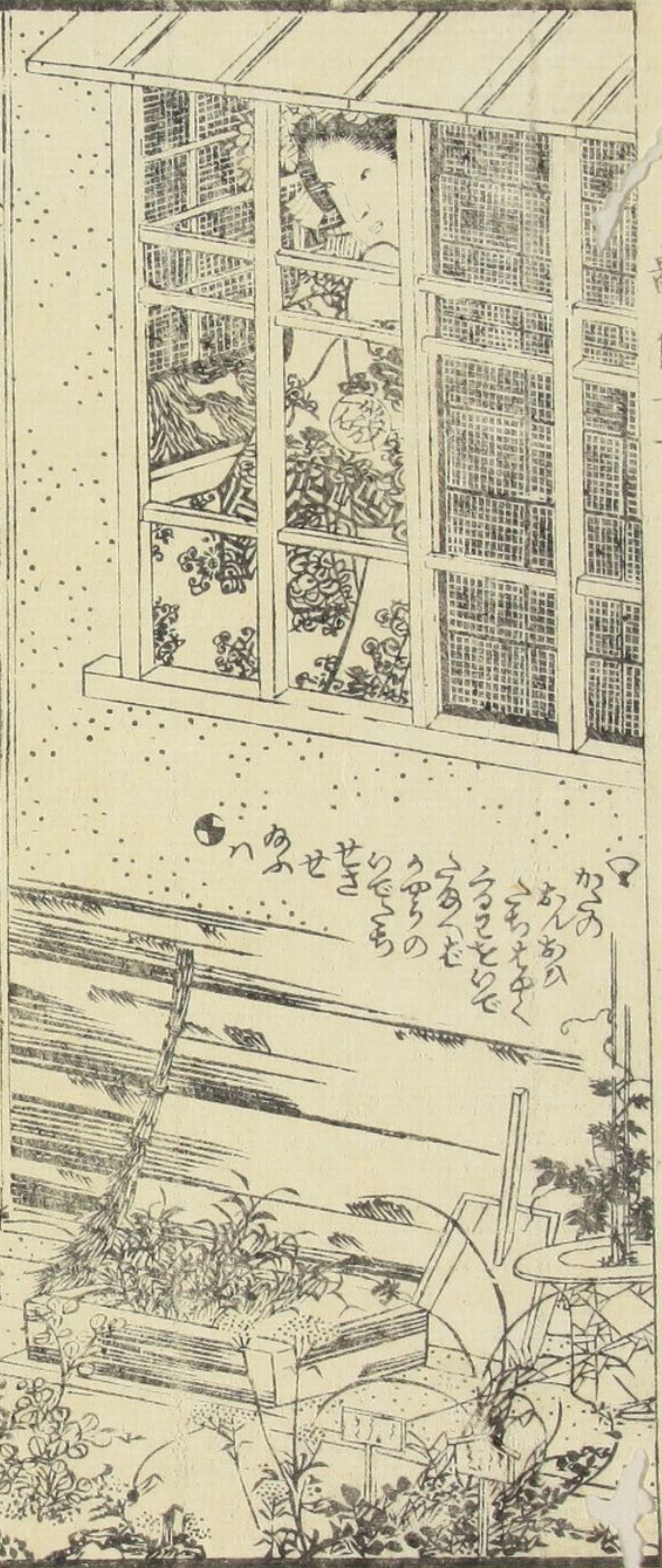


あつちの山に...
あつちの山に...
あつちの山に...

か小馬に...
か小馬に...
か小馬に...



あつちの山に...
あつちの山に...
あつちの山に...



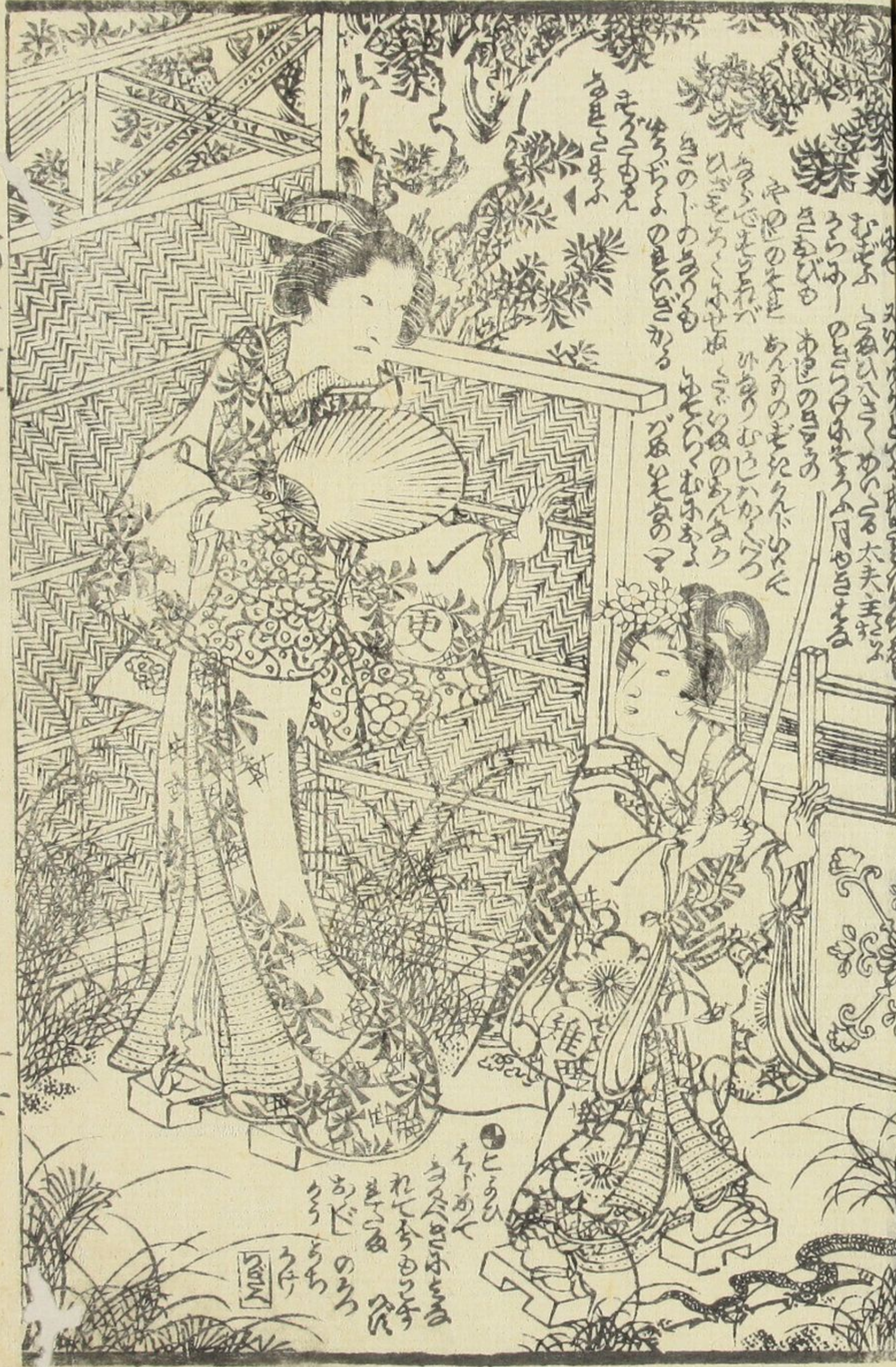
かあ
あんあひ
うらさな
うらさな
うらさな
うらさな
うらさな
うらさな

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ



あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あひつ めいひ めいひ あいひ さいはく さいはく さいはく さいはく さいはく さいはく
むせなぐむ せなぐむ せなぐむ せなぐむ せなぐむ せなぐむ
くふろく へろく へろく へろく へろく へろく
まらまら まらまら まらまら まらまら まらまら
ゆまゆま ゆまゆま ゆまゆま ゆまゆま
らんと らんと らんと らんと らんと らんと



三十一

うさやうのめい
けいごのめい
うさやうのめい
けいごのめい

うさやうのめい
けいごのめい
うさやうのめい
けいごのめい

のねが びのねが びのねが びのねが びのねが
つな つかつな つかつな つかつな つかつな
さか さいかさ さいかさ さいかさ さいかさ



うさやうのめい
けいごのめい
うさやうのめい
けいごのめい
うさやうのめい
けいごのめい
うさやうのめい
けいごのめい
うさやうのめい
けいごのめい

三十一



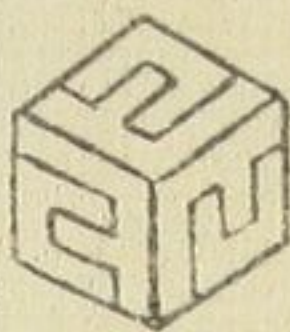
柏之助後室落葉

仕女爪糸脂



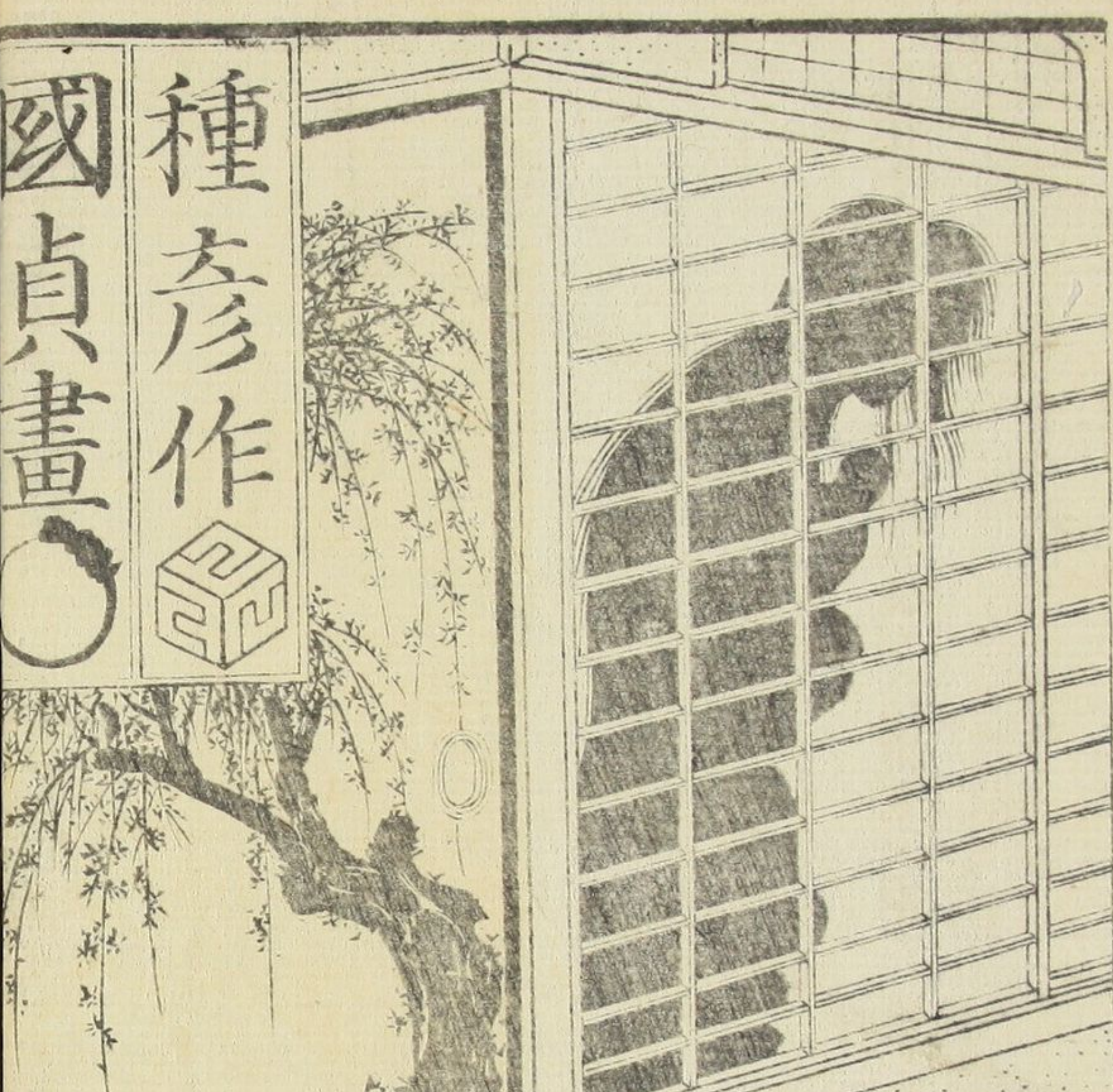
國貞畫

種彦作



備書
交束

同作十一



月白
ふりふり
さあさあ
あけくさ
なれふさの
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり

ひじくあや
女のうらら
あれくあえ
のうらら
とのま
のあえ
ひと
あさ
けび

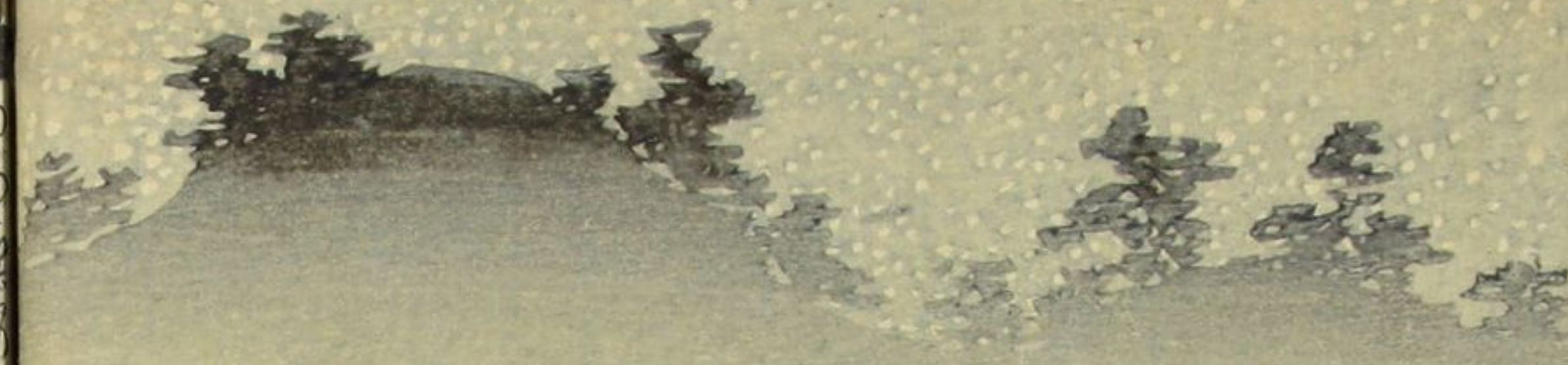
の
うら
ら
あ
え
ひ
と
あ
さ
け
び

けさのあられをききしに
 くらわぬさむらひのしん
 ぶらり川の瀬せし
 多きり
 人いそり
 徳書
 文書

足利雲井之煎氏仲

下巻廿二

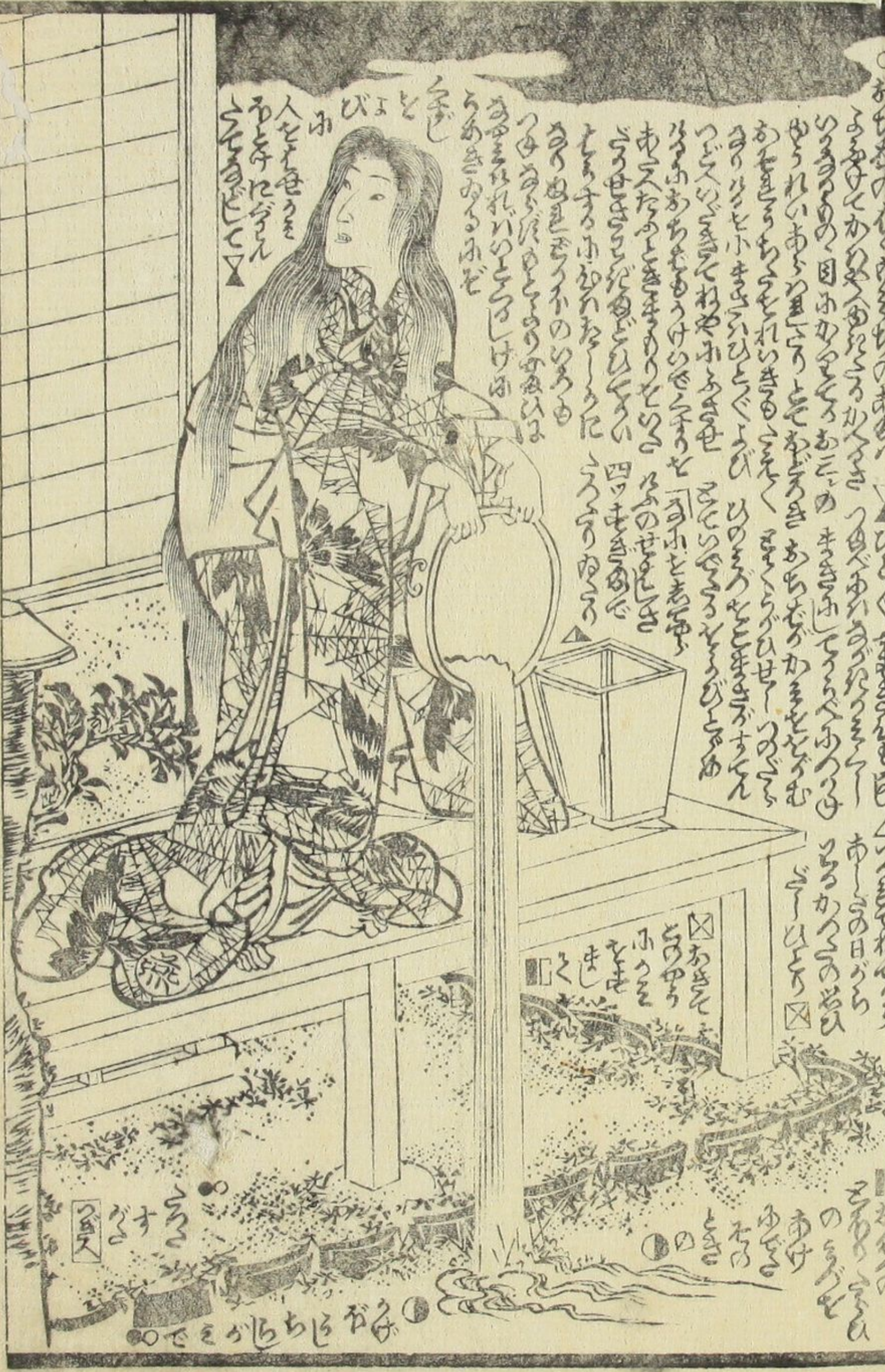




凡此紫文五十四帖と四季の桐壺より須摩
 明石の辺まゝ若木の桜花さく春ゆくそとより
 聖文の箱火のついで夏乃衣は袖軽くさへくとも
 名は若菜こそ賀の祝柏木も落葉して鈴虫夕きりと
 巻々の数重も人々の年齒とこもに老ゆきと秋野の千草も
 花はあれど湿りがちも光沢るく砧の槌乃しく拍子
 の画冊子小説て上手業をも興あらずと面白のめと
 得心はく前の續と見弁ありぬ愛顧と杖の翁乃舞あり
 宇治十帖の十月ころ狂咲も若さぎて陽來復の替白薫
 の若者揃ふ二番目めいさ仕組の腹帯發兌の時節も遠く
 後極て悲傷幻と御法の巻も株を守らば守て目出づく
 案趣考も不図浮くま忘れぬらふらと此編の緒言小御約束

い〜〜〜本文の
 模書小か〜らんやす

柳亭種彦



人ぞとを
 らと守れば
 とてあてて

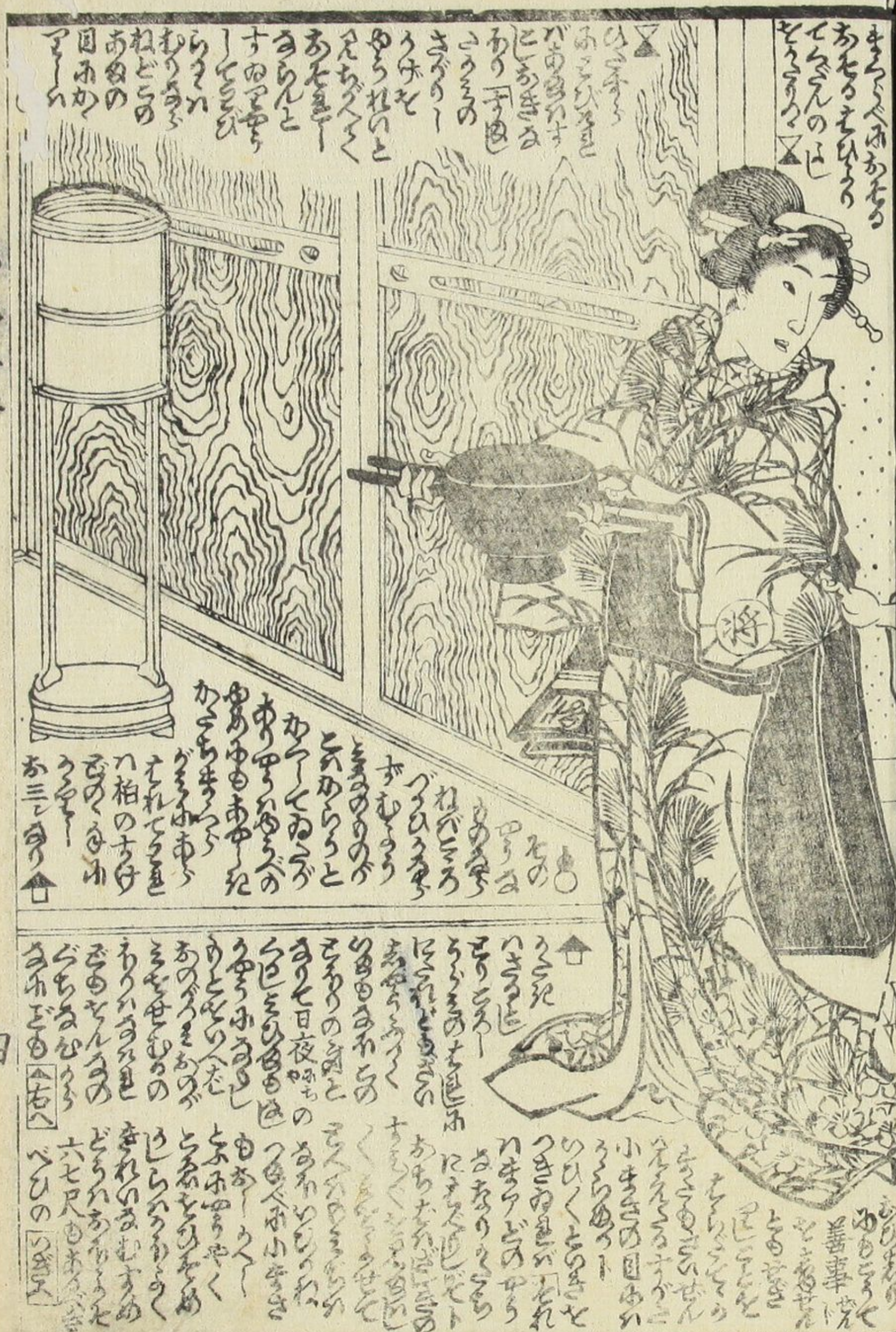


あつちのついでに

あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに



あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに



あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに

あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに

あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに



正徳十一年



番付十三



あつめ
ひと
の
ま

あつめ
ひと
の
ま

あつめ
ひと
の
ま

あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま

あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま

あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま



あつめ
ひと
の
ま

音

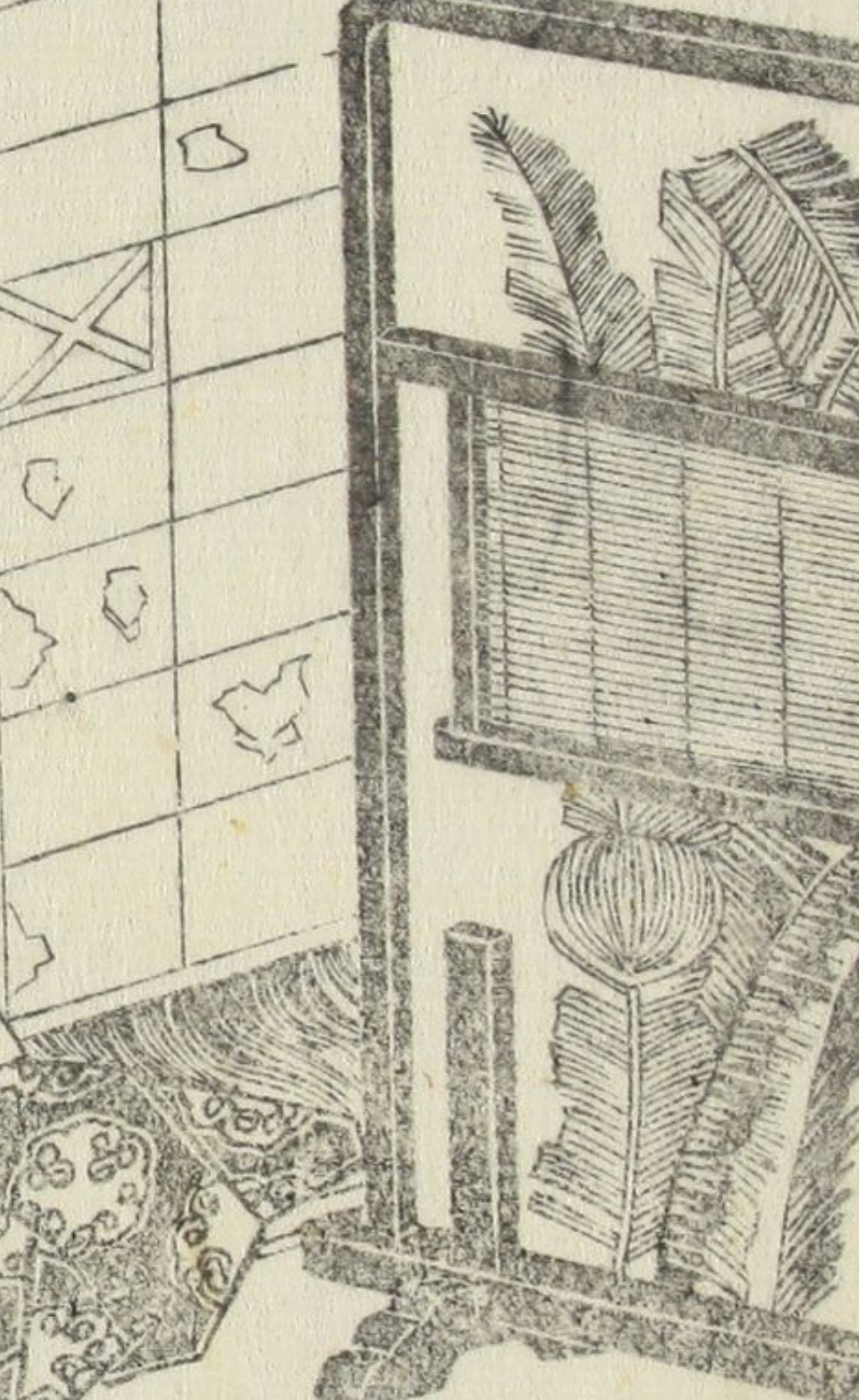
あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま

あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま
あつめ
ひと
の
ま

あまのうらちふらふらめ
ことまをちかすくへあま
のころせりあまの
うらちをさかすけく
うらちをさかすけく
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす



あまのうらちふらふらめ
ことまをちかすくへあま
のころせりあまの
うらちをさかすけく
うらちをさかすけく
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす

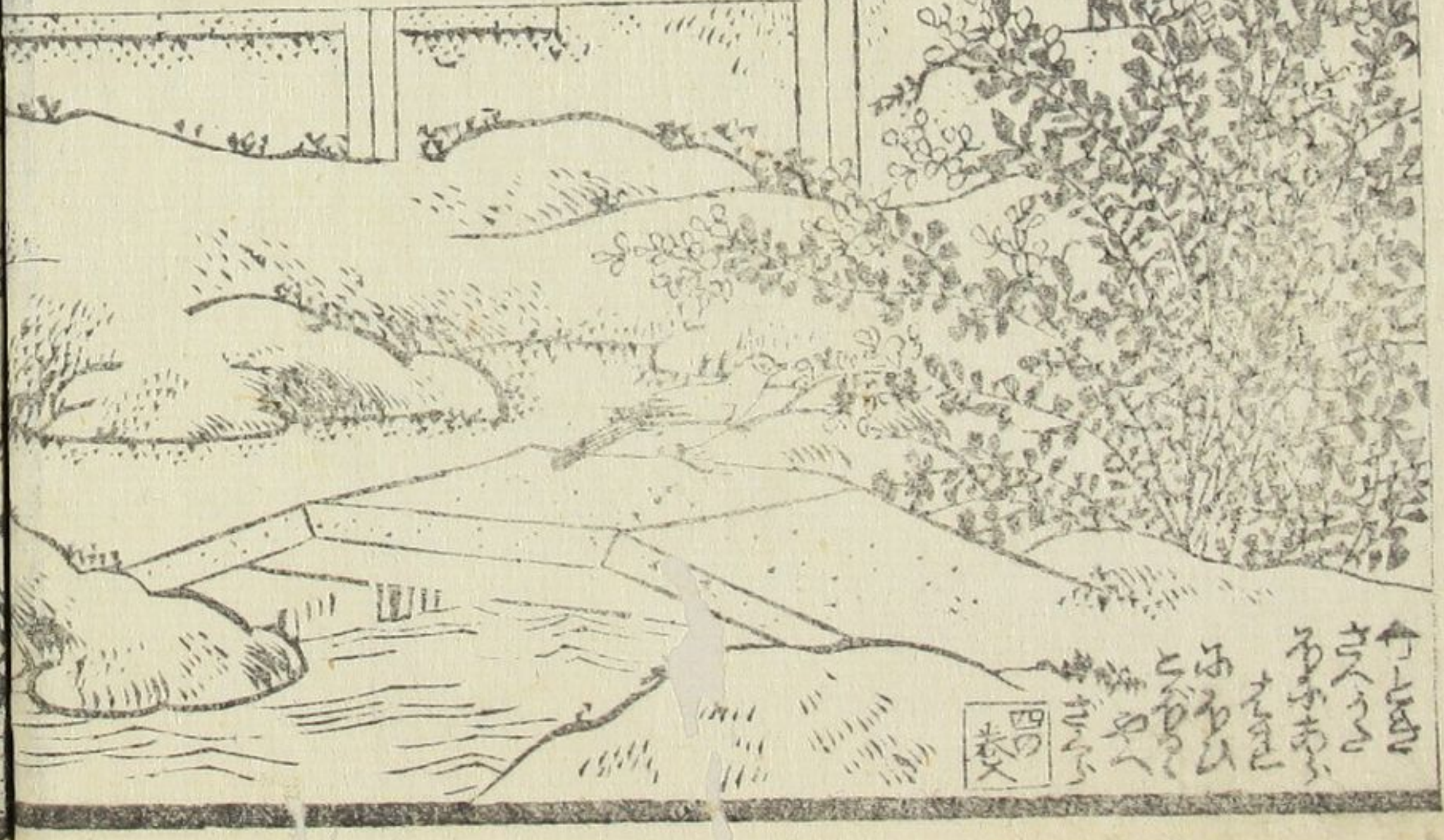
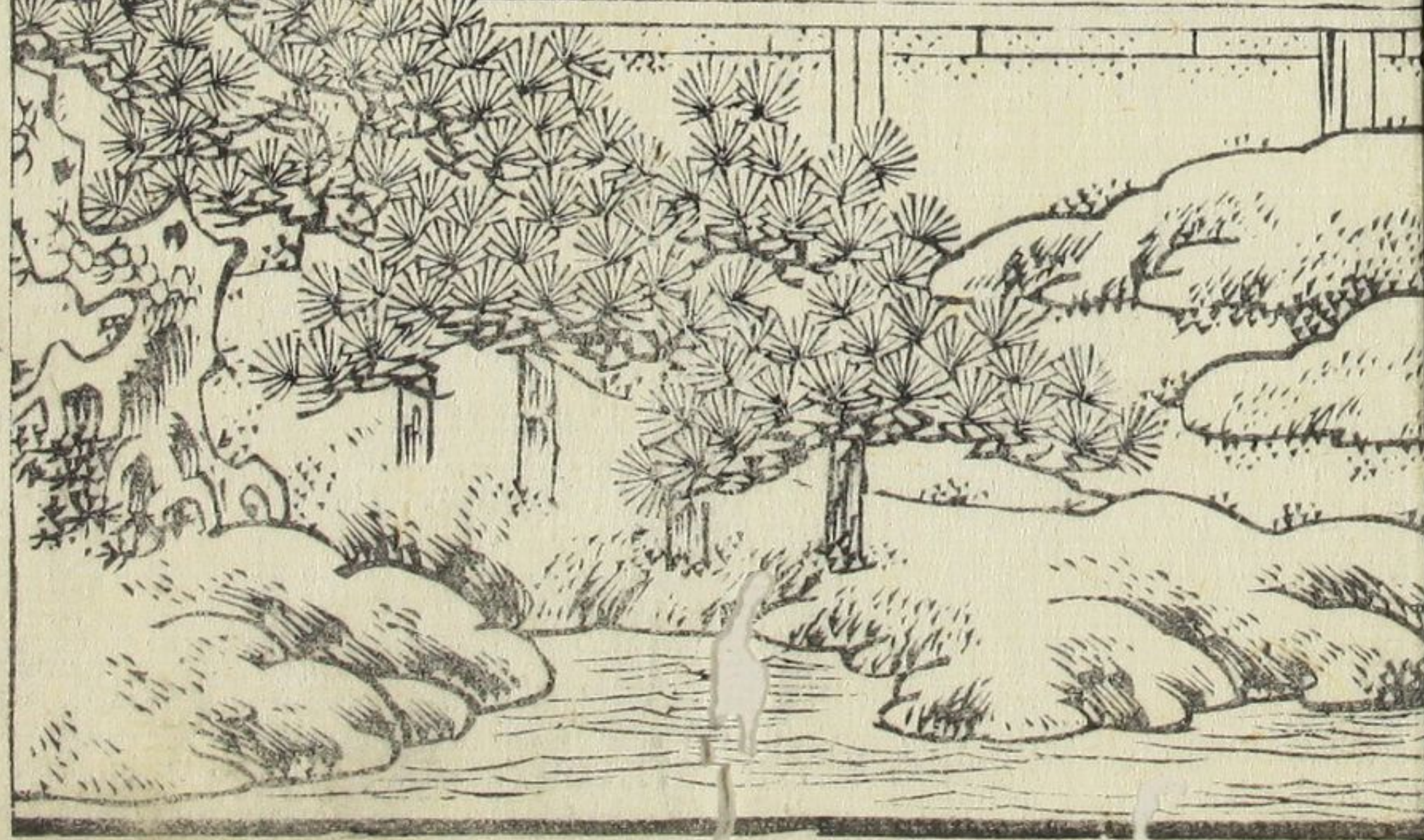
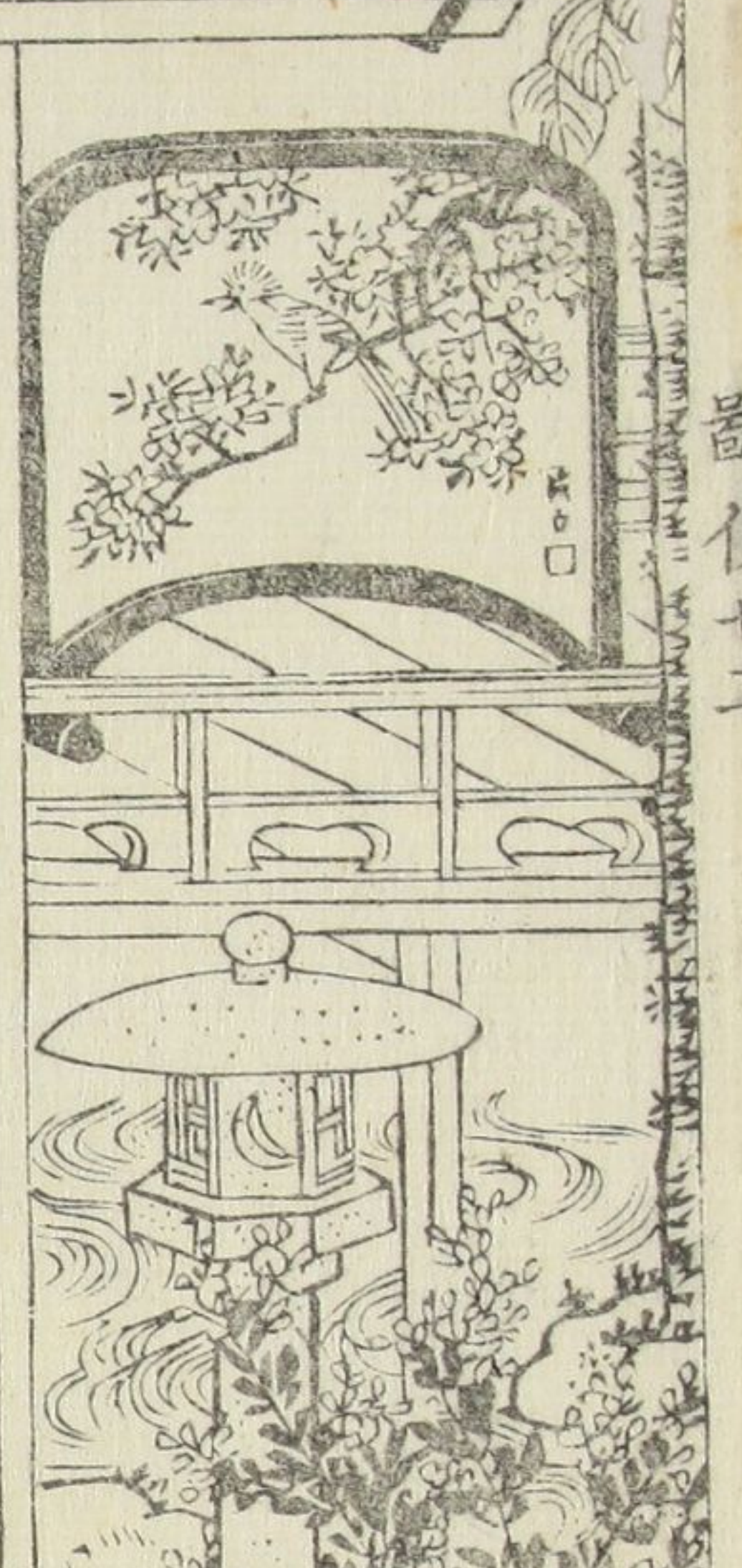
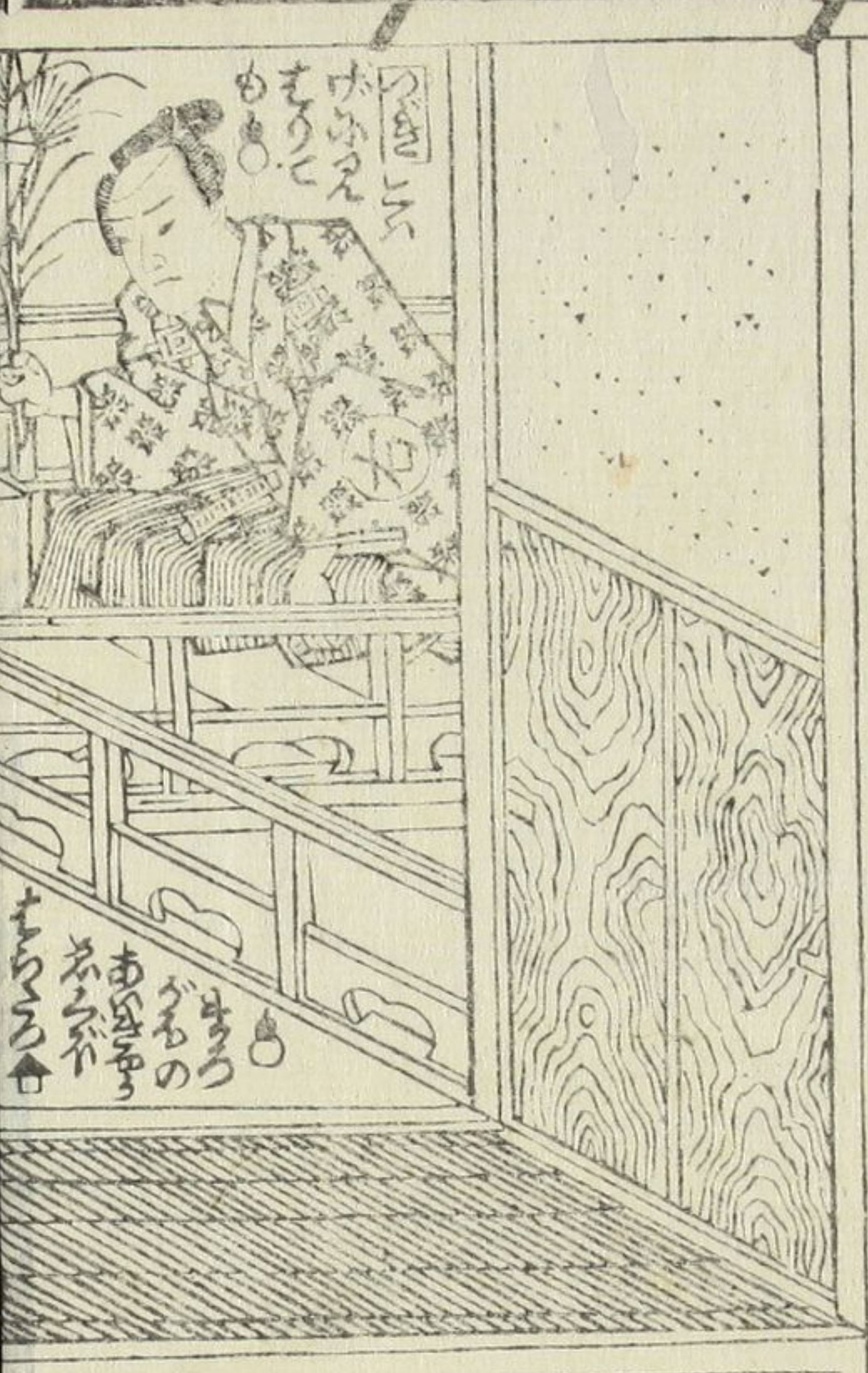
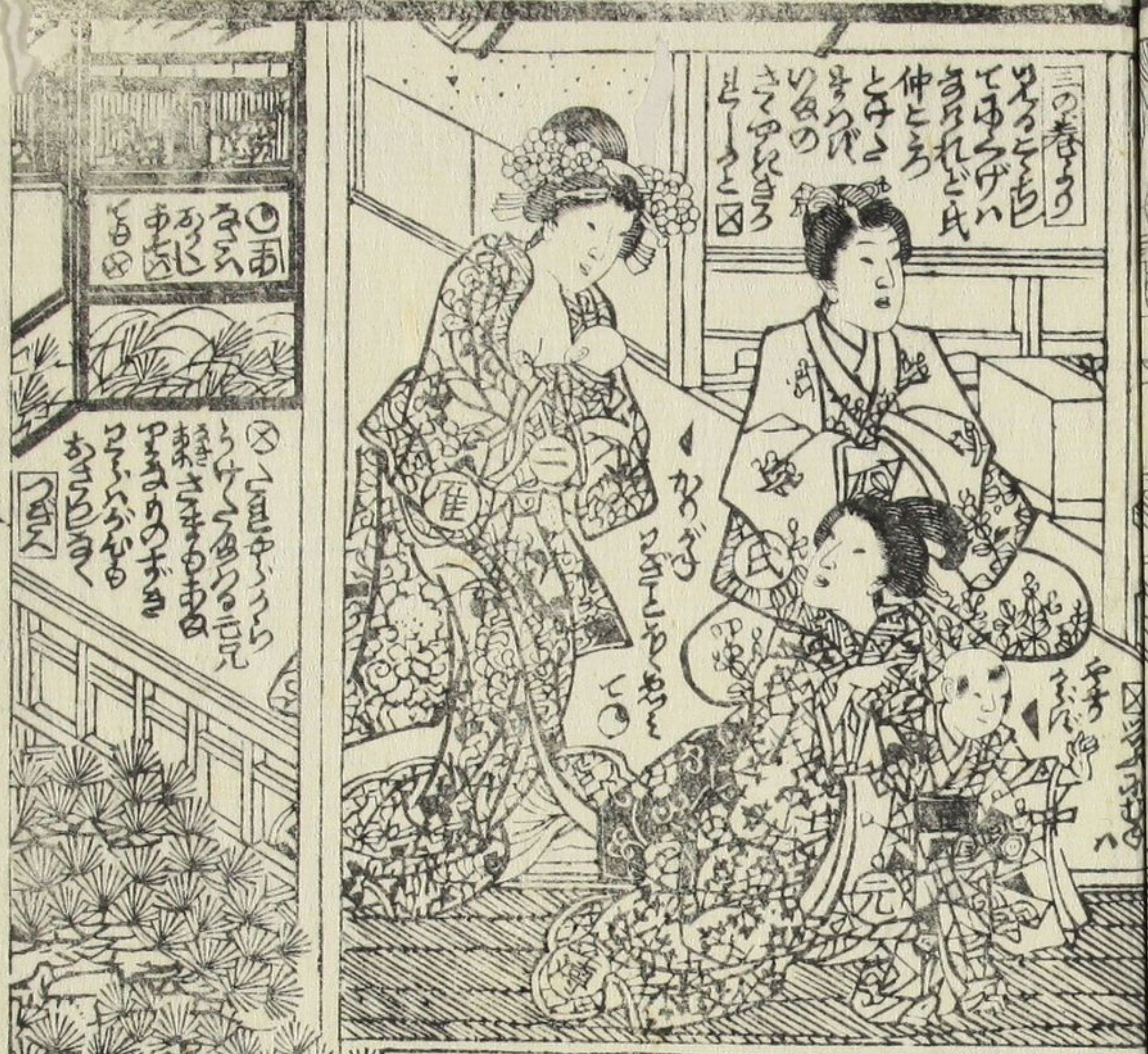


あまのうらちふらふらめ
ことまをちかすくへあま
のころせりあまの
うらちをさかすけく
うらちをさかすけく
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす



あまのうらちふらふらめ
ことまをちかすくへあま
のころせりあまの
うらちをさかすけく
うらちをさかすけく
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす
かりうのあまをさかす

部身仕二



部身仕二

あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

